

「多面的機能の発揮の活動と地域リーダー」
下池の里川保全と持続可能な地域づくり



北島 淳也
東海タナゴ研究会



牧野 暁世 (岐阜県)
下池地域農地・水・環境保全管理組合

一、要旨
ため池や水路などの「里川」は、集落や農地の基礎となってきました。同時に、里川の生物多様性は地域の風土として、持続可能な地域づくりの土台となってきました。しかし、農業構造の変化や地域の混住化などを背景とした里川管理の低下の影響により、里川の生物多様性は年々劣化してきています。従って、その保全をすすめる、持続可能な地域づくりを行うためには、これまで農家が行なってきた里川管理を、農家を中心としつつも地域住民による新しい枠組みで再構築する必要があります。そこで私たちは、岐阜県海津市下池地域において、様々な主体と連携した里川の生きものの保全活動を通じて、地域の風土を守り、農業の多面的機能(生きもののすみかになる機能、農村の景観を保全する機能、文化を伝承する機能、体験学習と教育の機能など)の発揮と、持続可能な地域づくりを行ってきました。魚類学会放流ガイドラインに基づく24年ぶりとなるウシモツゴ復元放流や水田魚道プロジェクトなどの取り組みを通じて、下池は生物多様性保全の拠点

として振わつてきています。平成26年度には、東海農政局農地・水保全管理支払交付金表彰(全国農村振興技術連盟賞)を受賞しました。本稿では最近の下池の里川保全と地域づくり活動について紹介します。

二、淡水魚の楽園、下池地域
下池地域(図1)は、濃尾平野の南西部、揖斐川・牧田川・津屋川に囲まれた輪中地帯に位置する農業地帯です。多様な在来種が生息し、絶滅危惧種の淡水魚、ウシモツゴやイタセンパラなどが近年まで確認されるなど、この地域は淡水魚の楽園として知られています。地域内は湿田が多く、この地域では「堀田」など半農半漁の農法が古くから営まれており、モロコ寿司や淡水魚の佃煮など淡水魚を用いた郷土料理に見られるように、農業と水生生物の親密な関係は人々の暮らしに欠かせないものでした。

平成16年に県営経営体育成基盤整備事業を実施し、畑作が可能な汎用田化がなされ、暗渠排水も施工されましたが、作物の収量が上がった一方で、もともと出作農家が多いこの地域に大規模農業経営農



図1 下池地域

家が増えたため、地域づくりに関わる人が減少してしまいました。そこで、持続可能な農業・地域づくりを目指すため、平成20年から地域の農業者、水利組合、自治会などからなる下池地域農地・水・環境保全管理組合が立ち上げられ、生物多様性保全活動を通じて地域づくりを実施することになりました。生きものの観察会やシンポジウムなどを定期的に実施し、持続可能な地域づくりに向けた合意形成を行ってきました。当初は、生きものの観察会に数人ほどしか参加者が集まらず、「地域づくりがもつともしづらい地域」と言われるほどでしたが、粘り強い活動の結果、徐々に参加者が増加し、地域の生物多様性に対す



写真1 下池産ウシモツゴ (Pseudorasbora pugnax)
写真/東海タナゴ研究会

る関心が高まってきました。

三、ウシモツゴと水田魚道を活用した下池の地域づくり
(一) 地域の希少種「ウシモツゴ」の24年ぶりの復元放流
ウシモツゴ(Pseudorasbora pugnax (写真1)は成魚で4~8cmのコイ科の淡水魚です。かつては愛知、岐阜、三重に分布していましたが、現在では、全国数ヶ所程度の山際のため池を中心にわずかに見られる程度に減少し、現在、環境省版レッドデータブックで絶滅危惧IA類(CR)に指定されており、岐阜県では希少野生生物保護条例で採集が禁止されています。圃場整備や水

路の護岸工事、暗渠化、ため池の埋め立て、外来種の影響などにより生息地が減少していると考えられています。下池は平地での最後の生息地であったと考えられています。平成2年に4個体を確認して以来、生息は確認されていません。平成16年に近隣小学校や琵琶湖博物館などと連携したウシモツゴの復元放流を視野に入れた魚類学会ガイドラインに基づいたプロジェクトが立ち上がり、平成24年には保全のための下池ビオトープが造成されました。その後、数回に渡る改良工事により、ウシモツゴの生息環境が整ったと考えられたため、平成26年7月6日に最初の復元放流を行いました(写真2)。放流用の個体として、琵琶湖博物館で系代飼育されてきた下池産50個体を用いました。当日は、東海タナゴ研究会の指導のもと、未来を担う子どもたち、海津市長、地域内外の住民100人以上とともに放流しました。その後も継続的に調査を行ない、順応的にウシモツゴの生息環境の整備を行なっています。今年6月にはウシモツゴの産卵が初めて確認できました。ウシモツゴを



写真2 ウシモツゴ復元放流



写真3 シンポジウム「里川の生きものと農業～水田魚道から地域の未来を考える～」

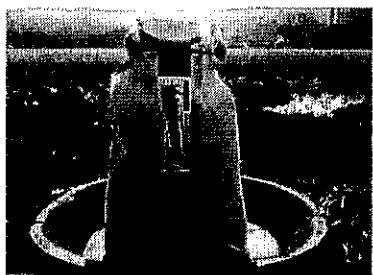


写真4 生物多様性保全米 本当に魚を増やしている田んぼのお米

池に根付かせるため、保全の際には下池ビオトープだけでなく、いくつかの保護池の確保と管理体制を整える必要があるでしょう。さらに活動を通じて、当たり前のようにウシモツゴが見られる地域にしていきたいと考えています。今後も子ども達との観察会や池干し体験、シンポジウム等の啓発活動を通じて、ふるさとの豊かな水環境を取り戻す活動を継続していく予定です。

(二) 水田魚道を活用した地域ブランド品の開発

里川の魚は春になると、産卵場所を求めて、栄養豊かな水田に遡上します。しかし暗渠化などによって遡上できなくなったため、生息数が減少しています。そこで、岐阜県との協働による水田魚道プロジェクトを開始しました。地域の農業者などに広く呼びかけ、農業と里川の生きものについての意見交換会を実施し、地域住民主体で水田魚道を設置しました。その後、定期的に地元農家が生きもの調査を行ってきまし。水田魚道にはメダカ、ドジョウ、ヨシノボリなどが遡上し、その先の水田で繁殖したメダカが約6万

8400匹(面積密度法による)生息していました。秋にはシンポジウム「里川の生きものと農業」水田魚道から地域の未来を考える」を開催し、ウシモツゴや水田魚道の取り組みについて約60名の参加者と情報共有しました(写真3)。この様子は新聞などに掲載されるなど、活動は県内外に広く紹介されました。魚道を設置した水田(約4000m²)では、農業を従来の半分に抑え、有機肥料や稲わらを使用し、約2100kgのコシヒカリを収穫しました。実際に魚を増やして育てたこの米は、サトガワキカクL.L.Cと㈱CAFが生物多様性保全米として商品開発を行い、道の駅等で販売を開始しています(写真4)。名古屋市の都市部から注文が来たり、早くも海津市のふるさと納税のための地域特産品に選定されたりするなど、生物多様性保全を土台とした地域ブランド商品のさきがけとなつていきました。また、これをきっかけに、六次産業化への関心が高まってきたり、余剰食材を活用して加工品製造も行いたいと地域から声も上がっています。今後は、六次

産業化準備部会などを立ち上げるなど検討を行っていきたくと考えています。

四、持続可能な地域に向けて
下池の生物多様性を土台とした持続可能な農業・地域づくり活動は、子どもたちの行動にも変化をもたらし、水路で夏休みには、水路で

魚採りをする子どもたちの姿を数多く見かけるようになりました。近隣の地元小学校では、地域の生きものについて学ぶ「里川の生き物クラブ」が発足しました。県外からは、学外研修として持続可能な地域づくりについて学びたいと、大学生が下池ビオトープや水田魚道の視察に訪れました。水田魚道における遡上調査を行った地元中学生は、「将来は魚を守りながら農業をしたい」と語っています。子どもたちのためにも、これからも、農業の多面的機能を発揮した、東海地方を代表する「ふるさとセンター」として下池を盛り立てていきたいと考えています。

私たち自身、下池地域の生物多様性に魅せられたヨソモノ、ワカモノ、バカモノの一人です。「小学生の頃、お弁当のおかずにはイタセンバラが入ると恥ずかしくて隠して食べたい」と、下池で育った地元の方は言います。60年前はバケツ一杯の淡水魚があつたという間に採れたのだそうです。粘り強い活動の結果、下池は生きものの賑わいを取り戻しつつありますが、淡水魚の楽園と言われたかつての風景を、ワカモノはまだ見たことがないのです。私たちは懐かしい思い出を昔話のままにしたいありません。下池のかけがえのない宝物を、未来を担う子どもたちにつないでいきたいと思っています。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。
(2015年8月受稿)